

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

数学はつまらなかつたけれど、数学者はなんて魅力的なんだろうと思いました。第一に、彼らがみんな数を愛していることが驚きでした。数は私にとっては無機質で無感情。ところが彼らにとっては愛すべきものであり、星や花と同じように、美しいものだったのです。このことは大きな発見でした。

もう一つの発見は、数学者たちの謙虚さ^①でした。数の世界は無限です。人間よりも大きな存在の何かがそれを創り、人間は与えられた知恵を使ってその仕組みを発見していくしかない。つまり、数学者たちは人間は創りだす存在ではなく、発見するだけの存在であることをわきまえ、広大な数の世界の前で、感動に打たれ、謙虚にひざまずいているのです。広い砂漠に埋もれている一粒の宝石を探し求めて悪戦苦闘している数学者のイメージが、私の中にわきあがってきました。私は数がそれほどまでに美しいものならば、必ず物語になると確信しました。

問 傍線部①「数学者たちの謙虚さ」を説明した
ものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

① 数が星や花たちと同じように美しく、我々に感動を与えてくれる存在であることを知っているところ。

② 数の世界が無限であるのに対し、人間の世界が有限でうつろいやすいものであることを知っているところ。

③ 自分が新たに何かを生みだすのではなく、すでにある何かを見つげるだけの存在だと知っているところ。

④ 広大な数の世界を制御するためには、ひとつの真実を求めて悪戦苦闘するしかないことを知っているところ。